

はじめに

「不登校とは、もとの自分に戻るとか元気になるための充電期間などではなく、まったく新しい状態に移行するための『進化の過程』であり、その途中のステージだと思う」

あなたにとって不登校とは何かという質問に、こう答えてくれた青年がいます。もちろん、それぞれの不登校の意味は一人ひとり異なるでしょう。しかし、私がこれまで向き合ってきた子どもたちの「現在」をみるとき、あれはまさに「進化の過程」だったんだなあ、と腑に落ちるものがあるのです。

私たち「登校拒否の子どもたちの進路を考える研究会」（略称：登進研）は、1995年の発足以来、年数回のセミナー開催を中心に、不登校に関する調査研究、支援活動を行い、今年で28年目を迎えます。セミナーでは、主として保護者を対象とした講演、Q & A、個別相談などを行っています。なかでもリクエストの多いのが「体験者の話を聞く会」です。

「わが子が何を考えているのかわからない」「この状況がいつまで続くのか」という不安の中で、かつて不登校を経験し、そこから一步を踏み出した当事者の話を聞きたい、そして、

「うちの子もきつと大丈夫」という希望や安心をつかみたい、と願う親の思いは切実です。その思いになんとか応えようと、不登校経験者やお母さんお父さんをゲストに迎え、お話を聞かせていただく機会をたびたび設けてきました。

そこから生まれたのが本書です。これまでセミナーでご登壇いただいた、のべ七十余人の若者たちとそのご家族の、心に響く言葉を集めました。どうぞ耳をすませ、心をすませてください。お聞きください。大勢の、ときには200人近い参加者を前に、「不登校を経験したから、いまの自分がある」「不登校になってよかった」と言つてのける彼ら彼女らを目の当たりにして、本当にうれしく、頼もしく、誇らしく思います。

その言葉が出てきた背景やカウンセラーのアドバイスも掲載しています。当事者の言葉とあわせてお読みいただくと、より理解が深まり、また新たな視点が得られるかもしれません。さらに、本書に登場した若者たちには、「彼ら彼女らの現在地」というテーマで原稿も書いていただきました。当時をふりかえって思うこと、近況などが記されています。長くセミナーを続けてきたことから、24歳から48歳まで幅広い年齢層の「若者たち」が集まりました。読みすすめるうち、当時の彼ら彼女らの姿が目に見え、思わず涙がでてきました。

先にお話ししたように、当研究会の活動も28年目に入りましたが、当初は、正直ここまで長く続けることになるとは思っていませんでした。それはとりもなおさず、不登校の子どもたちの置かれている状況がまだ好転したとは言いがたいことを意味しています。それどころか少子化にもかかわらず、学校に行けない子どもたちはますます増えつづけているのが現状です。まだまだ私たちも頑張らなければなりません。

最後になりましたが、当研究会の発足当初からご協力をいただき、本書の刊行にも力を貸してくださった専門家の方々、本書の主役である不登校のへ先輩たちと、ご家族に心からの敬意と感謝の意を表します。そして、この企画にご賛同いただき、出版に向けて背中を押してくださった、ほんの森出版の小林敏史さん、ありがとうございます。

いま渦中であつて、日々迷いながら揺れながら、でも、一歩一歩前に進もうとしている子どもたちとお母さんお父さん。一日も早く、ひとつでも多く、あなたの笑顔が増えていきますように。

2022年盛夏

登進研代表 荒井裕司